

1960年代初頭、インテリアという言葉が日本語にはまだ定着していなかったが、めまぐるしいスピードで進化していくインテリアデザインの世界を概観すると、いくつかの世代に分けることができる。剣持勇、渡辺力、柳宗理らの第一世代、境沢孝、倉俣史朗、北原進らの第二世代、内田繁、杉本貴志らの第三世代。この章では、80年代にデビューした第四世代の近藤康夫、飯島直樹、河崎隆雄らの仕事を通して、インテリアデザインの変遷を読み解く。

## 【一】 近藤康夫

### ミニマリズム、環境芸術を経て、 第四世代のインテリアデザイナーへ

インテリアデザインが定着し始めた60年代後半

1980年ほどのような時代だったのかを考える上で、重要な座談会がある。それは『インテリア』（80年1月号）の「インテリアデザイン領域の拡大——総括から80年代への展望」という特集のために企画された。出席者は伊藤隆康（造形作家）、北原進（インテリアデザイナー）、倉俣史朗（デザイナー）、光藤俊夫（建築家）、竹山実（建築家）で、山口勝弘（造形作家）が司会を務めている。最初に山口の視点で60年代を次のように総括している。「60年代はじめというのは、確かに『インテリア』あるいは『インテリアデザイン』という言葉が日本語にまだ定着しない時代で、恐らく建築という言葉の中にそういう問題も含まれて一般に認識されていたわけです。ところが、それに対して〈芸術〉という言葉があつて、建築と芸術という問題についての認識というのは60年代にあつた。やがて、そこへ『インテリア』という言葉が入ってきたわけです」

座談会の出席者、倉俣史朗の発言にも触れておきたい。

「ひとつの特徴としては、『インテリアデザイン』という言葉が、商業空間から入っていつてそこへ定着したのが60年代の後半だったんじゃないかと思うんです。（中略）それともうひとつ、僕の中で個人的に意識をしていたのは、60年代前半にかかわらず、商業空間

注1 伊藤隆康（いとう・たかやす 1934-1985）造形作家。東横百貨店宣伝部に入社し、ディスプレイを担当する。独立後、アート制作と並行して店舗のインテリアデザインも手掛ける。代表作に「負の球」（1967年）がある。

注2 北原進（きたはら・すすむ 1937-）インテリアデザイナー。東急百貨店白木屋家具設計課、パンフィックハウスを経て、フォルムインターナショナル設立に参加。その後NLDアソシエイツ設立。店舗のインテリアデザインだけでなくホテルやオフィスなどのインテリアデザインを手掛ける。